

江戸の坂道散策

伊皿子坂 (港区)



1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務めた。この十数年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に。著書に「江戸の坂——東京・歴史散歩ガイド」(朝日新聞出版)、「江戸と東京の坂」(古地図で歩く江戸と東京の坂)(以上、日本文芸社)がある。

山野 勝 Yamano Masaru 坂道研究家

都 営浅草線の泉岳寺駅A2番出口を出ると、眼前に大きな通りがある。泉岳寺参道の前で北へ屈曲し、次の信号(Aとする)で北西に向きを変えて、「伊皿子」の信号まで上り、二本榎通りと交差する。この広く長い坂を伊皿子坂という。この道筋も江戸時代に開設されたものだが、それ以前に造られた旧伊皿子坂の通りは、先の信号(A)のところで東へ向きを変え、第一京浜に出る小道だ。『忠臣蔵』の赤穂浪士は人目を避けるため、この旧道を通って泉岳寺に入ったともいわれる。「伊皿子」という地名の由来には諸説ある。①『更級日記』の中に、この辺りを指す地名として「いいらふ」というのが出てくるが、それが訛って「いさらご」に変化したとする説。②坂の西側にあった長応寺に中国・明の亡命者で、耳鼻科の医師の王三官という人が住んでいた。世人は彼が夷人(外国人)なのでエビスと呼んだ。これがインベイスと訛って、これに「伊皿子」の字があとれた。後年、元の音が忘れられて、「いさらご」と誤読されたとする説。

そのほか、この地に住んでいた大仏陸奥守貞直(北条高時一族)の「大仏」が「いさらご」に変化したとか、泉岳寺に隣接してあった如来寺の大仏を「おさらぎ」と読み、それが転訛したとかの説もある。別名を潮見坂という。この辺りは潮見崎と呼ばれ、坂上から品川の海が見渡せたのだ。また、坂上の東にある三田台公園付近は「月の岬」と称され、「二十六夜待ち」で賑わう月の名所でもあった。雄大な伊皿子坂から往時に思いをはせたいものだ。



泉岳寺にある浅野内匠頭長矩の墓。

茶屋 一眼

本文中で触れた泉岳寺には、赤穂城主・浅野内匠頭長矩とその夫人・瑠泉院の墓のほか、大石内蔵助良雄をはじめとする赤穂浪士の墓がある。実際には切腹しなかつた寺坂吉右衛門と、討ち入り前に自害した萱野三平の供養墓もある。浪士の墓は、預けられた大名家(細川家・松平家・毛利家・水野家)ごとに並べられ、氏名の上部に、切腹した印の「刃」の字が刻まれている。

伊皿子坂アクセス ▶ 都営浅草線・泉岳寺駅A2番出口を出ると、前の通りが伊皿子坂。右折すると坂上に向かう。